

# 研修会報告

## 2021 年度滋賀支部主催第 1 回資格更新研修会

2021 年 9 月 18 日（日）

日本臨床発達心理士会滋賀支部主催

講 師：松島明日香先生（滋賀大学教育学部）

テーマ：発達診断と子ども理解—1 歳半と 4 歳の発達の節を中心に—

松島先生は、発達障害、特に自閉症スペクトラム児の心理学的理解、心理アセスメントの方法論的検討を研究テーマの中心とし、精力的に活動されています。

ご講演ではまず、発達診断とは何か、というお話がありました。発達水準における 3 つのレベルとして「発達の状態・水準の把握」「発達の变化的把握」「発達の動態の把握」を挙げられました。はじめの 2 つは日常の様子や検査の結果により見ることができですが、3 つめの「発達の動態の把握」については表面的に見えている部分だけでは捉えきれないことを教えていただきました。長期間にわたる発達上のもつれやつまずきがあったとしても、それは発達が止まっていることと同義ではないことを私たちは把握しておく必要があります。「診断」よりもより個別的な「見立て」という表現を使って語られる発達診断の考え方が印象的でした。

検査場面でよく使われる、年齢が上がるにつれて正解する人数が増えていく課題がありますが、年齢が上がるにつれて一度正答率が下がり、その後正答率が上昇する課題もあることがある、ということにもハッとさせられました。例えば、「今と未来の自分、変わらないところは？」という質問への回答は、小学校低学年では「外見的特徴」を挙げる子どもがほとんどですが、小学校 3 年生になると「分からない」が最も多くなります。そして「分からない」を経て、変わらないのは「内面的特徴」である、ということに気づいていくという質的転換過程の特徴的な姿を現しています。「分かる」「分からない」の結果だけではなく、なぜ「分からない」なのだろう、と考えることや観察をすることが、発達を語る根拠となっていきます。

1 歳半と 4 歳の発達の節についても、丁寧にお伝えいただきました。私は養護学校の教員をしています、初めて教員になった年に、4 歳頃の発達の子もたちと学習をしていました。そのころは目の前の子どもたちと日々を必死に過ごしていましたが、「〇〇をしながら●●をする」などの課題がちょうどできるようになっていくような子どもたちだったのだろうな、ということ松島先生のお話を聞きながら振り返っていました。目の前にいる子どもを見て、「この学習や、この課題が合っているのでは」と教員の目線で考えることももちろん大切ですが、「この子は、この力を手に入れつつあるところだろう」と発達の視点を持った上で関われば、より子どもたちにとって手応えのある学習にできたかもしれません。他律から自律へ向かう時期の子どもたちが、大人に先導されるだけでなく、自主的に活動する場面を工夫して設定していくことの大切さも、先生がなされたインタビュー調査の結果から、実感させられました。

発達診断の場では、発達相談員一人が対応することが多いのではと想像しますが、応援団をつくり、ネットワークで支援していくことが大切だということを知りました。また、診断の後の支援は、支援者一人ですることではないと思います。保護者、学校関係者、相談支援の人たちが協力して支援していく中ではやはり、発達診断では「こんな傾向がある」という指摘だけではなく、「こうしたら 1 歳半の壁を越えられるかも」などといった前向きな支援のポイントを提起することが大切なのだと感じました。

今回のお話を聞かせていただき、子どもの「できたこと」、「できなかったこと」だけではなく、「なぜできたのか」、「なぜできなかったのか」に注目し、その意味を説明することの大切さを感じました。その意味をしっかりと前向きな言葉にして伝え合いながら子どもを理解することで、より子どもに沿った支援が行えるのではないかと感じます。

（滋賀支部 鈴木ひろみ）